



# 言語を使って——言語派社会学

——橋爪研究室～人文社会群——



橋爪 大三郎 助教授



## 社会学はトータルな学問

「社会学」とは、そもそも何をする学問なのだろうか。これは一言でいうと、人間のいろいろな営みの相互関係を説明する学問である。一般の学問は、研究対象となる現象が政治学であれば政治だけといったように限定されているが、社会学にはそのような限定がない。なぜなら、我々が社会の中で生きているということはトータルな営みであって、法律的問題も生活に起こりうるし、経済問題とも関係してくるからである。さらに政治、宗教などいろいろなことを日常生活で体験する、そういう全体的な存在が人間である。だから法学や経済学といった独立した学問分野の、相互関係を扱う必要がでてくる。

よって社会学は、我々がふだん学んでいる自然科学とは問題の解決の方法がかなり異なっている。社会学は漢方薬に例えることができる。そ

れに対して、自然科学のように対象領域のきちんと決まった学問は、西洋医学の特効薬に例えられる。発熱した場合に解熱剤が素早く効くようにきちんとした方法論が確立されていて、目的が素早く解決される。しかし全体を直そうとするときには特効薬のようなものでは効果が薄い。漢方薬のように経験的に効き目があると解っているものをうまく組み合わせさせて使っていく方が、問題の根本的な解決に結びつく。きれいな公理的体系があり、方法論がきちんと確立されていて百発百中で解答が得られるというような学問ではない。

ではその社会学に何を組み込んで新しい体系を作り上げていくか。それは、個々の社会学者が考えることである。今回お話を伺った橋爪先生は、言語に着目され、現在言語派社会学の樹立をめざして研究をなさっている。



## 既存の社会学における問題点

先生が大学で社会学を始められた頃の有力な立場は、システム論とマルクス主義であった。

システム論とは、社会を一つの複雑なシステムであるとみなして社会を解析していくものである。社会は企業とか地域といったように、個々バラバラの要素で構成されている。さらに、それぞれの要素は細分化でき、最終的には、個々の人間まで、

パーソナリティーシステムとして細分化される。社会の全体像を記述するためには、要素ごとに記述でき、かつその相互関係も記述できることが必要である。

だがこの場合、システムとして全ての現象を捉えきるためには、それを見る視点がどこにあるかということが重要なポイントになる。社会を客観的に観察するためには、それか



ら離れた位置で眺める必要がある。しかし、人間はパーソナリティーシステムとして社会の中で生きている。だから自分自身を社会の外側に置いて観察するという事は、矛盾した行動である。

システム論を用いて社会を記述すると、確かにいろいろなことを説明できるが、人間が社会を生きているというリアリティーが落ちてしまうのだ。具体的に言うと、人間が意味を理解したりするのはなぜか、他の人間を理解できるのはなぜかといった一番根本的な社会関係の基礎の部分が明確に記述できないのである。このような当事者の視点というものを取り込むことが、システム論は非常に不得手である。

これに対してマルクス主義は、イデオロギーとか上部構造を考えることによって、システム論では取り込むことが難しかった、人間が生きる意味についてもいちおううまく取り込んでいる。だがマルクス主義で一番の問題点は、この考え方が示す社会法則が、人間の社会は古代社会から資本主義を経て社会主義、共産主義へと流れるとする、歴史法則だということである。歴史の流れは人間には動かしがたいものであって、人間はの中でジタバタしても、大きな法則性は変えることはできないことを信じるのが、マルクス主義には必要である。しかし、個々の人間の生きている意味が歴史とつながらない場合は、我々の社会の成立ちを

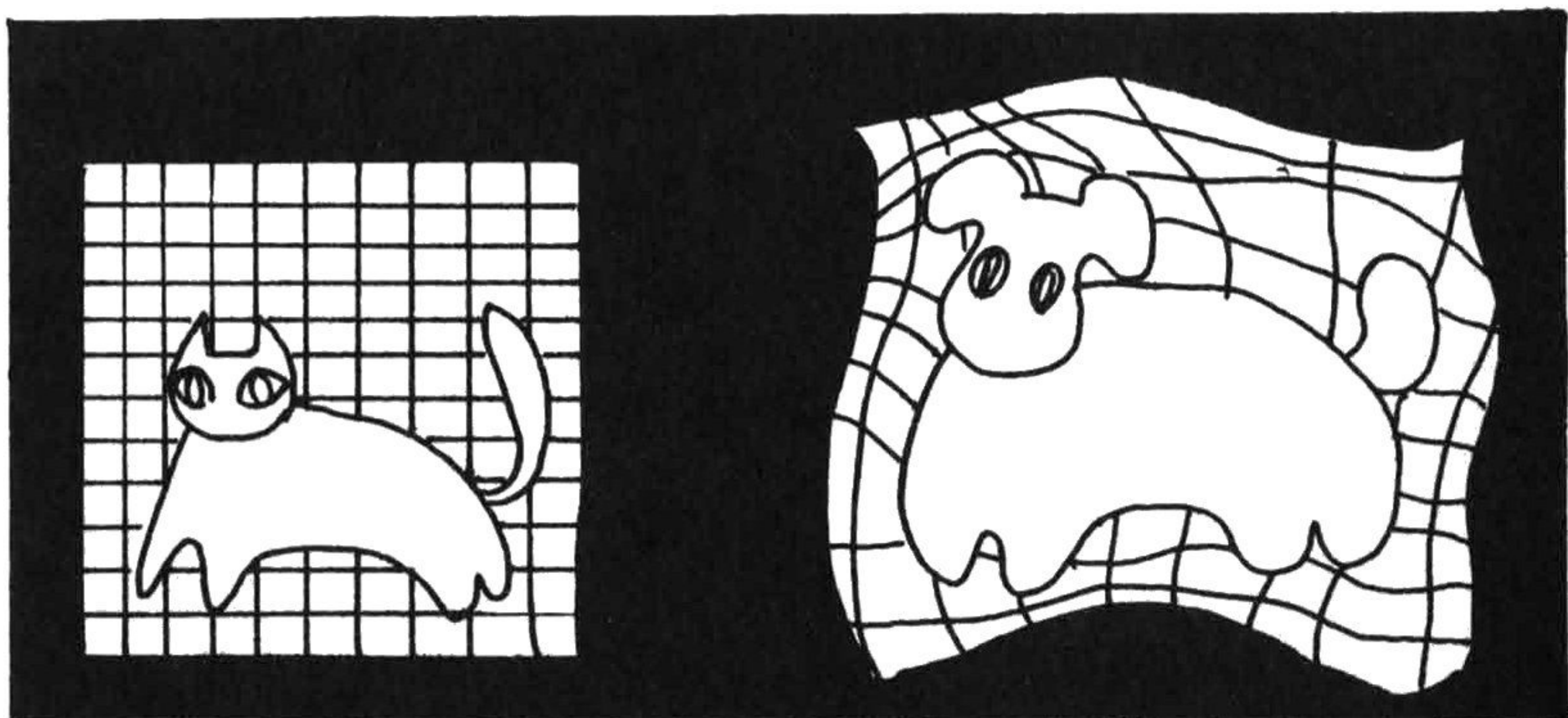
うまく説明できなくなる。また、本当に歴史がそのような大きな流れをたどるかどうか証明されていない。その歴史の流れを信じないとマルクス主義が始まらないのだとしたら、これは科学ではないはずである。仮にそのような歴史法則があるとしても、いろいろな考え方をもち、自由に行動する人間が集まった場合に、どういうロジックで社会に法則性が出現してくるのかが論証できていない。それに、唯物論の立場に立ち、物質現象しかないと主張していながら、イデオロギーや観念といったものの存在を認めていることも矛盾を含んでいる。

## 言語派社会学——中間的存在としての言語を用いて

既存の社会学では、どうしても突破できない問題が残る。ならば、既存の社会学が手を付けていない領域に、社会学的な関係を説明するための新しい手法を築けないかと橋爪先生は考えられた。そこで目をつけられたのが言語である。先生が言語に着目された理由は、言語が持っている不思議な性質のためである。各人の主観的な世界、例えば感情を表すためには、自分自身にとってそれがどういう感情だったか具体的に把握できることが必要で、このときにはどうしても言語を用いなければならない。しかし他の人にも分かるから言語なのであって、他の人と共有できることが前提となっている。このため、言語は客観的なものだとも言える。すなわち言語は、主観的な性質も持つし、客観的な性質も持つということになる。

伝統的な哲学では、世界は物質世界（客観）と精神世界（主観）で出来ていて、この二つの世界には相互

関係がない、という前提で社会を捉えてきた。だが現象として関係があるのは当り前のはずである。そして、この二つを結びつけるのが、中間的存在としての言語と考えられる。動物の関与と人間の関係が違ふのは、言語やその他の記号を使って抽象的な関係をつくりだすことで、会ったこともない人との間にもいろいろな社会関係が生じてくるという点だ。人間社会は言語と非常に深いつながりがある。とすると、ここに二通りの考え方が可能である。一つは、何





か他の前提から、言語がこのような社会現象として成立したと説明することである。一方、そのように帰納的に説明できなければ、言語を使っていることを前提として、そこから

演繹的に考えていけば社会を記述できるはずだ、という考え方も成り立つ。この後者の立場が、橋爪先生の考えられた言語派社会学なのだ。

## 記号空間論——言語と性と権力と

言語を公理として取り込むと、いちおう全ての社会現象をカバーできそうだが、それだけでは完全とは言えない。そこで先生は、言語以外に“性(セックス)”と“権力”を独立なものとして付け加えることにより、言語派の一つの具体的な理論化の試みとして、記号空間論を組み立てようとしている。

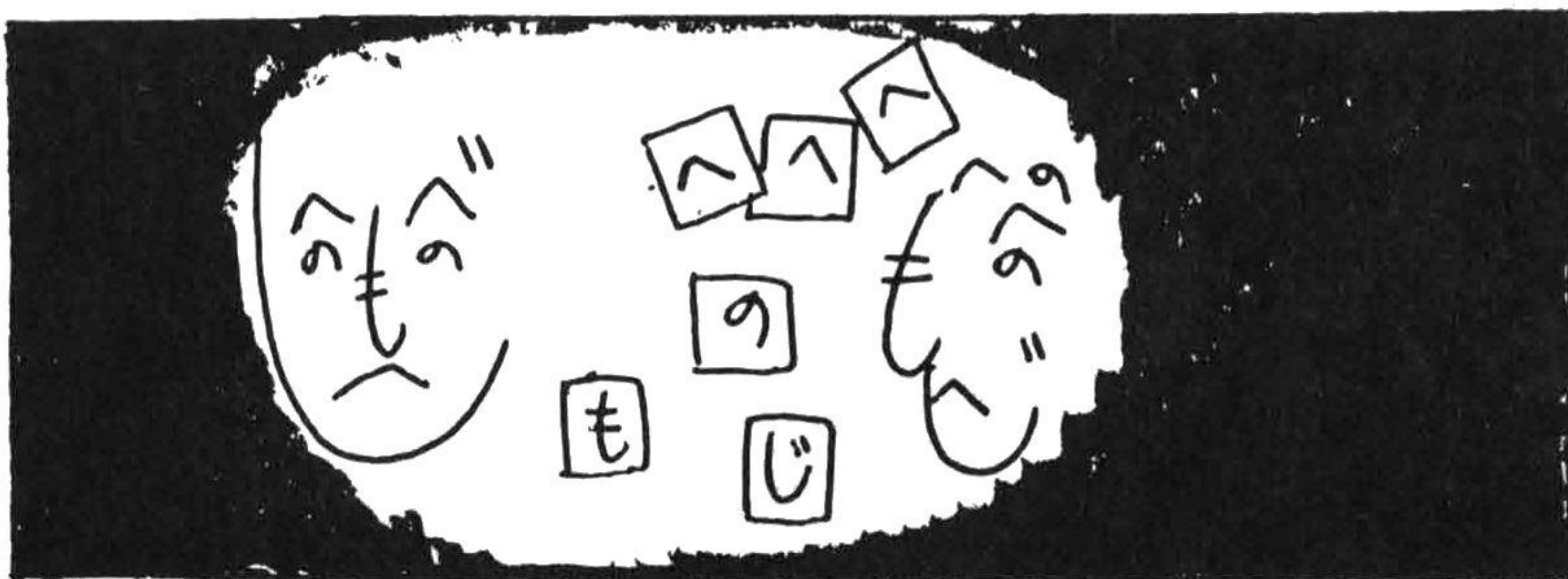
言語は、形式(フォルム)を介在させているという点で、間接的な人間関係を表している。音声はそれ自体空気の振動であって、自然現象の一つでしかない。だが、フォルムであるからこそ文字に変換することができ、時間や空間を越えて他の人に伝達できる。そうして、宗教とか法律といった新しい社会関係ができあがってくると言える。

それ以外に、人間と人間が直接関係を持つ場合が考えられる。これはセックスの関係と言える。身体である人間は、他の身体から生まれてくるという形でしか存在し得ない。このような関係は、母と子の関係であり、社会関係としてみると家族になる。ここから結婚という関係も派生する。このような意味での性関係一

般も生じてくる。また人間には猥褻感というものがある。これは動物にはないことなので、性(セックス)が社会的な現象であるという一つの根拠になる。さらに人間には社会的な性別というものがある。このように、性は社会をつくる重要な原理の一つだと言える。

言語と性は、フォルムを介するかどうかの二者択一で、互いに独立した原理である。しかしあらゆる現象を言語化しようとしても、最後に残ってしまうものがある。その部分は言語よりもさらに間接的なもので、言語で捉えることはできない。それはいわば想像力に起因する人間関係で、これを“権力”という。つまり、現実には起こっていないが、「こうなるといけないから、このように行動せざるを得ない」ということが権力なのだ。だから、想像力の乏しい小さな子供などには権力はあまり働かない。また人々が、死後のことを考えることから形成される宗教も、一つの権力と言える。

記号空間論の着目が正しければ、社会の変遷の仕方と、言語、性、権力それぞれの変遷の仕方とは、お互いに関係があるはずである。例えば貨幣は、言語と権力の特別な組合せと考えることが出来るだろう。貨幣を介在して、マーケットといった人間関係が生じるのである。橋爪先生は、今後この理論の応用として、日本の社会の歴史的な成立ちを考えていかれる予定だとおっしゃった。





日本という国は、従来分かりにくく、記述しにくい国だと言われてきた。なぜそのように言われるかというと、今まであった社会学の用語はヨーロッパ人が使ってきたもので、ヨーロッパの社会をうまく記述できるように作られていたためである。それだから、文化的に脈絡の違う世界に持っていくとうまく記述できない。例えば、人格とか自由といった言葉でアフリカの原始的な社会を記述しようとするとうまく記述できない。それよりも、現地の住民の言語を用いた方が、うまく説明できるはずである。

どのような社会でも記述できる枠組みをつくるのが社会学の役割だとするならば、社会を説明するのに

用いる言葉をかなり抽象化する必要がある。しかしヨーロッパではあまり高い抽象性がなかったため、ヨーロッパ以外の社会を記述するのに適当な言葉は創られなかった。だから、例えば言語とか性とか権力などという、抽象性が高くて、日本もヨーロッパもうまく記述できる言葉で新しい理論を組み立てる必要がある。そして、ヨーロッパの社会を説明する場合や日本の社会を説明する場合には、それぞれもう少し具体的な言葉を使って説明すればよいだろう。このようにすることで、二つの社会に関係がつけば、両方の社会が比較できたことになるのだ。

このようにして日本を記述するためには、仏教に着目すればよいと先

生は考えられた。仏教はインドからシルクロードを通して中国や東南アジア、日本へ伝わってきた、民族にとらわれないものである。しかし、それぞれの社会ごとに形を変えてゆき、日本にくと日本独特の仏教になった。本来普遍的であるはずのものが、日本に入ってくることで変形してしまったのだ。これは仏教だけでなく、儒教に関しても同じ様なことが言えるはずだ。中国におけるオリジナルなものにどのような力が加わってこうなってしまったのかを解明すれば、日本が仏教や儒教が入ってくる前から持っていた独自の前提というものが明らかになるはずである。



## 東工大で人文社会学を学ぶ意義について

東工大はまぎれもない理科系の大学である。そのため人文社会関係の科目を軽視する学生もいる。そこで橋爪先生にその事を言ってみると、「うーん、そうですか。それは当然です。今までの社会科学は面白くないから。決まりきった学問として勉強したらあまり面白くない。そうではなくて、自分の日常と関係があるということがわかれば、何だって面白いですよ。」という答えが返ってきた。自然科学の難しさは、二階微分方程式が解けないとニュートンの運動方程式が理解できないように、入口にある程度の高さがあることである。それに対して社会科学の難しさ

は、扱う問題があまりに身近にあるため、気が付きにくいことである。だからちょっとしたコツでわかるようになるはずだし、わかるようになれば、社会学がより面白くなるはずであるとも先生はおっしゃられた。

また私たちがこの理系の大学で社会科学を学ぶことの意義について、先生は、2つのレベルで答えてくださった。1つは理系の人間といえども、日本の企業文化とか、現代の資本主義文化といった現実の社会で生きている。そこにはいろいろな人間関係がある。だから、理系の人間という自己限定があっても、人文社会学についても最低限のことを踏まえ

ておく方がよいとのことである。もう一つは、専門を離れて普通の人間になった時に、理系のことしかやっていなければ、好きなことをやれと言われても、何をやって良いのか全然わからなくなってしまうかもしれない。そういう意味で欠落した部分を作らない方がよいはずである。

「嫌だったら、やらなくてもいいんだよ。だけどアンテナを延ばしておくだけでもいい。入口をかじるだけでもいいから、そういうものを掴んでおけば、将来それが自分の主義主張になるかもしれないし、文系の人たちとも友達になれて共通な話題も出来るだろう。」

最後に橋爪先生は職業的な専門家に期待をかけているとおっしゃった。例えば職業として自然科学者である間は、日本人であるということを意識しないで世界共通のフォーマットの上で仕事をしているはずである。政治家やジャーナリスト、外交官、

軍人など職能を持った人たちが、自分達は世界共通のフォーマットで世界につながっている、という自覚をもって自分の持ち場を守れば、一般の人にも世界全体があらまに見えてくる。そうして社会像が見えてくると、一般の日本人が、外国人に

日本のことをきちんと説明できるようになり、もっと世界の中でうまくやっていけるようになるだろうと先生は考えておられる。

(片山)